DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research
21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

035

暴力と和解のあいだ
ーあるコミュニティ活動家のライフ・ヒストリーを通してー

尹　慧瑛

February　2008

http://cner.law.hit-u.ac.jp

Copyright Notice
Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.
All enquiries to cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp

暴力と和解のあいだ
ーあるコミュニティ活動家のライフ・ヒストリーを通してー

一橋大学 COE 研究員
尹慧瑛

はじめに

1996 年の夏、ベルファストのシティ・ホール向かいにあるリネン・ホール・ライブラリーで A5 版の簡素なブックレットを見つけ、なんとなく心惹かれて手にとった。その後もベルファストを訪れるたびに探してみると、ブックレットはシリーズを重ねていた。その多岐にわたるテーマや内容の深さ、何よりそうした類の出版物が継続して刊行されていること（北アイルランドにおいて、たくさんのパンフレットが発行されてはすぐに消えていくという運命を考えると、これは希有なことである）に半ば勇気づけられるようにして、私はそのブックレットを収集するようになった。やがてそれは、どのブックレットにも「コーディネイター」として名を記している、マイケル・ホールという人物への関心につながっていった。

北アイルランドでは、紛争にまつわるさまざまな暴力が社会を分断してきたという歴史がある。多くの人びとがそれぞれのやり方で紛争を生き、またその結果であり原因でもある〈分断〉を生きてきた。他方で、いつの時代にも〈2つのコミュニティ〉のあいだの対立を解くことを目指して、両者の和解に取り組んできた人びとがいた。マイケル・ホールも、そうしたコミュニティ活動家の一人である。では、いったい何が彼をそうした活動に向かわせたのだろうか？本稿では、北アイルランド紛争の歴史と、あるコミュニティ活動家のライフ・ヒストリー[(1)]とを重ね合わせることで、〈2つのコミュニティ〉のあいだの分裂・対立と、そこから逃れようとする人びとの経験に光をあててみたい。そうすることで、分断された人びとをつなぐことの難しさと可能性について、考えてみたいと思うからである。

1．北アイルランド紛争の背景

数世紀にわたってイングランド／ブリテンの支配下にあったアイルランドが 1922 年に自由国として自治を獲得した際（1949 年にはアイルランド共和国となる）、プロテスタントが多数派を占める北部六州がイギリス領に残留したのが、今日の北アイルランド問題の起源である。北アイルランドの帰属をめぐってカトリック系住民の多くがアイルランド統一を望む「ナショナリスト」であり、プロテ

(1) マイケル・ホール氏の半生に関わる記述について、特に明記しない場合はすべて Michael Hall, *Grassroots leadership (7)* (Island Pamphlets No. 78), Newtownabbey: Island Publications, 2006 に依拠している。

スタント系住民の多くがイギリスとの連合維持を望む「ユニオニスト」であるとされるが、両者は必ずしもイコールで結べるものではない。しかし、両者が同義であるかのように見なされ、すぐさま対立させられることこそが、北アイルランド問題の硬直化を招いてきた。

1960 年代末に登場するカトリック系住民を中心とした公民権運動は、ユニオニスト支配体制下での差別的な政策に対する「異議申し立て運動」であったが、デモ行進などでの度重なる衝突によって両派の緊張が高まるなか、北アイルランドは紛争へと突入する。紛争における暴力の主体は、両派の武装組織[2]や地元警察、治安維持の名目で派遣されたイギリス軍など、合法／非合法に関わらず武器を持つ人びとでありながら、死亡者・負傷者の半数以上は一般市民だった。

北アイルランド社会は、しばしば「二つの伝統」「二つの文化」「二つの歴史」を持った社会などと表現される。この「分断社会(divided society)」におけるそれぞれのコミュニティをどのように名付けるとしても、それを決定的なものにしたのは、いうまでもなく、 1960 年代末に始まった紛争である。北アイルランド紛争において、実際に暴力を行使しているのは一部の人びとにすぎないが、長期にわたって日常化した暴力は、二項対立的な見方を増長させ、もともと両者のあいだに横たわっていた分断をよりいっそう推しすすめることになったのである。

北アイルランドにおける大部分の人びとは、その〈分断〉状況ゆえに、人生のそれぞれのステージを自分たちのコミュニティの内側で経験する一方、親密で継続的な関係をもう一方のコミュニティに属する人びととなかなか形成しえない。居住区、教育、雇用、婚姻などによってコミュニティの分断が再生産されてきた状況において、地域や階級による違いはあるにしても、互いに対立させられてきた者どうしが本当の意味で「出会う」ことのできる場はまだ限られている。あるいはそのような接触が起きるのは、わずかな混住地区に暮らし、共通の職場、教育機関などによりアクセスしやすいミドルクラスにおいてであるが、そこでは、両者の関係に緊張をもたらすようなお互いの違いについての確認や議論は、注意深く回避されるのだ。

紛争社会に暮らす人びと自身が強く主張するのは、この紛争が、しばしば誤解されるように宗教を理由としたものではないということである。北アイルランドにおいて〈カトリック〉、あるいは〈プロテスタント〉であるということは、それぞれ単に宗教上の信仰をあらわすのではなく、ほかのさまざまな項目と歴史的・政治的に結びつけられているということを意味する。居住地、出身学校、読む新聞、好きなスポーツ、言葉のアクセント、名前など、「どちらの人間であるかを見分ける」ためのさまざまな手がかりが存在し、それらを通して、たえず境界が確認される。そして、ここでの宗教とは、歴史や経験と不可分の、〈2つのコミュニティ〉それぞれに与えられたエスニックなラベルと見なすことができるのだ。だとすれば、この両者の和解を目指して活動してきたマイケル・ホールの経験とはどのようなものだったのだろうか。まずは、彼のアイデンティティ形成の出発点となったであろう、その生い立ちから見ていくことにしたい。

(2) 「ナショナリスト」「ユニオニスト」それぞれの政治目的を武力を用いてでも達成しようとする勢力をそれぞれ「リパブリカン」「ロイヤリスト」と呼ぶ。前者にはさまざまな分派を持つ IRA 、後者にはアルスター義勇軍(UVF)、アルスター防衛協会(UDA)などがある。

2. 理想と現実のはざまで

(1) 家族と生い立ち

マイケル・ホールは 1949 年に、5人兄弟の長男として東ベルファストに生まれた。彼の家は「プロテスタント」の労働者階級コミュニティにあり、オレンジ・オーダー[(3)]や、B スペシャル[(4)]のメンバーでもあったが、家の中で「プロテスタント」という言葉を耳にしたことは一度もなかったという[(5)]。ホールがみずからに貼り付けられた「ラベル」について初めて意識したのは、子どもの頃に通っていたアイリッシュ・ダンス・スクールでの友人の一言がきっかけだった。「きみはプロテスタント？それともカトリック？」。よくわからない、と答えたホールに、友人はこう言ったそうである。「それならきっとプロテスタントだよ。カトリックならわかってるはずだから」。

ホールの両親は、北アイルランド社会の〈分断〉と強く結びついた宗教や歴史、政治にとらわれることなく、子どもたちを育てていった。実際、子どもたちは、(「カトリックの文化」であるところの)アイリッシュ・ダンスを習っていた。しかし、少年だったホールはほどなくして、北アイルランド社会に深く根ざす亀裂を目の当たりにすることになる。彼の姉がダンスコンクールで素晴らしいパフォーマンスを披露し見事少女部門で二位に輝いた時、あるカトリックの家族がホールの母に近づいてこう言ったのだ。「あなたのお嬢さんが当然一位になると思っていた。でも、残念なことにそうならなかったのは、明日の『アイリッシュ・ニュース』[(6)]に優勝者としてプロテスタントの名前が載るのを、たぶん主催者が嫌がったからだと思うわ」と。

これは、心をかき乱される出来事だったと彼は回想している。しかし、やがて北アイルランド全体を巻き込んでいった「紛争(the Troubles)」は、より冷徹な現実を彼につきつけることになったのである。

(2) 紛争のはじまり

1960 年代後半は、北アイルランドにおいて公民権運動が大きなうねりを見せた時期であった。1968 年の 10 月 5 日にデリーでおこなわれた公民権運動のデモ行進に対して、警察は中止命令を出した。北アイルランド公民権協会(NICRA)は参加者たちに解散を促したが、警官との押し合

---

(3) 1795 年創設の北アイルランド最大のプロテスタント組織で、1690 年のボイン河の戦いにおけるウィリアム3世(オレンジ公ウィリアム)の勝利をその信条的基盤としている。その勝利を記念する行進(オレンジ・パレード)が、毎年7月 12 日におこなわれている。

(4) 1970 年にアルスター特別警察(USC)の廃止にともなって創設された、元メンバーらによる組織。ロイヤリストの武装組織と関連があるとされていた。

(5) こうした家庭背景は、その後の彼の経験とあいまって、独自のアイデンティティ形成に大きく寄与したと思われる。ホールは、北アイルランドという場所、そこに暮らす人びとに愛情を持ちながらも、「ブリティッシュ」、「アイリッシュ」、あるいは「アルスターマン」というアイデンティティのいずれも、彼の内にある文化的特性の全体をあらわすのに不適切であると述べている。Alwyn Thomson (ed.), *Faith in Ulster*, Evangelical Contribution On Northern Ireland, 1996, p.59.

(6) ナショナリスト系の新聞。

いへし合いの末、プラカードが警官に投げつけられ、警官は参加者たちを警棒で無差別に殴りつけるという騒ぎに発展した。

翌日、クイーンズ大学の学生たちが中心となったベルファストのリネンホール・ストリートでの座り込みの抗議行動に、若きホールも参加していた。彼は、若年層を中心としたラディカルな公民権運動組織である「ピープルズ・デモクラシー(PD)」[7]のメンバーだった。公民権運動が展開される以前、彼らの関心は、もっぱら海外での動きーヴェトナム戦争や、1968 年のフランスにおける「5月革命」へとつながるような、世界各地で繰り広げられていた学生運動などーに向けられていた。自分たちが暮らす土地で大きな変化が起きていることは、多くの若者にとって、大きな衝撃であったという。

しかし、ホール自身は、両親の教育を通して社会主義思想の影響を強く受けながらも、「国家によって支えられたマルクス主義」への疑念をつのらせていた。彼にとって、マルクス主義やレーニン主義は、また別の権威主義的な宗教、非常に危険で抑圧的なものと映ったのである。それよりも彼の関心は、アナキズムー普通の人びとが、資本家、共産主義者、政治家や聖職者、その他諸々にたよることなく、みずからの生を営むことができるという信条ーに惹きつけられていった。こうして彼は、同じ志を持つ幾人かの仲間とともに、リバータリアン社会主義を標榜する「ベルファスト・アナキスト・グループ(BAG)」を結成する。しかし、その初会合が開かれたのは 1968 年の 10 月 5 日の夜であり、多くのメンバーになるはずの者たちは、デリーの公民権デモに出かけていた。このことは、やがて北アイルランドを泥沼の紛争へと導く〈2つのコミュニティ〉間の激しい対立を前にして、彼らの運動自体が持っていた矛盾を予兆していたのである。

(3) BAG 、PD の活動と挫折

ホールが、みずからの北アイルランド社会に対する認識がまったく不充分であったと思い知らされたのは、1969 年1月4日のバーントレットでの出来事だった。PD は、政府の改革案を不服として、ベルファスト～デリー間の長距離デモをおこなったが、4日間にわたる行進の最終日、バーントレットで約 500 人の行進者に対してユニオニストの攻撃がしかけられた。警察はこれを黙認し、なかには攻撃に加担した者もいた。

ホールは、1日にベルファストを出発した一団には加わっていなかったが、3日の夜に BAG のメンバーと PD のスポークスマンから要請を受け、デモ行進最終日のために BAG の幕旗をデリーに持参する役目を負っていた。彼と仲間たちがデモ行進の現場近くに到着してみると、そこはすでにプロテスタントの群衆にとりかこまれていた。そしてデモ隊が視界に入ってくると、群衆は彼らめがけて押し寄せ、石を投げつける者もいた。すぐに飛び交う石に覆われてデモ隊の姿は見えなくなってしまい、やがて行進からはぐれてしまった血を流した仲間たちが、ホールたちと合流していった。いったん中断された行進は、BAG の幕旗を先頭にデリーに向けて再開されたのだが、デリー市内の通りにさしかかったところで、一行は再び襲撃される。ホール自身も何度も何度も頭を殴られ体を蹴られるという暴行を受けるなか、楯にしていた幕旗はあっという間に奪い取られ、燃やされたという。ホールはこの時のことを回想して、次のように述べている。

(7) のちに史上最年少で英国下院議員に当選したバーナーデッド・デヴリンを輩出したことで知られる。

すべてが私にとってショックだった。それは肉体への攻撃に対する物理的なショックだけでなく、心理的、あるいは文化的とさえいえるものだった。私を攻撃してきた男の顔は、どうやっても理解できないような憎しみで満ちあふれていた。私は、両親から受けてきた宗派にとらわれない教育が、果たして自分にとってこの社会の現実に充分備えるものだったのだろうかと疑い始めた。私は失われた時を埋め合わせるために、急速に学びつつあった。そうして初めて、私や他の仲間たちが、知っていて、あるいは知らずに、それが解き放たれるのを手助けしてしまったものについて、大きな不安を感じたのである。

やがて BAG のメンバーの多くは、PD の活動にエネルギーを注ぐようになり、BAG の活動は尻すぼみになっていった。1973 年に活動の終焉を迎える直前の会合で、BAG 創設メンバーの一人でもあり、PD でも重要な存在となっていたある人物が、その頃大規模な爆破活動を展開していた IRA 暫定派を批判すべきでないと発言したことに対し、ホールは「リバータリアン社会主義思想を公言する者がどうしてそのようなことを言えるのか」と仰天したという。紛争が長引くなかで、「かつてわれわれが共有していた真にインターナショナルで社会主義的な思想は、砕け散っていった」のである。

BAG が解散したのち、ホールは一握りの仲間たちと、「ベルファスト・リバータリアン・グループ」を結成する。そこでの目的は、残忍な暴力とセクタリアニズムが蔓延するなかで、この状況を打ち破るために何ができるかを考えることであった。ホールたちは、北アイルランドの現状を分析したパンフレットや、「汝の敵を知れ」というテーマでシリーズ化されたシルクスクリーンのポスターを制作し、労働者階級へのアピールを試みたが、いずれも武装組織からの妨害や脅迫を受けた。こうした一連の出来事を経てホールは、社会のあらゆるセクターーリパブリカンの運動、ロイヤリストの武装組織、ユニオニスト体制、イギリス政府、教会、経済界などーに対する激しい憤りを感じるに至った。と同時に、これまでおこなってきた活動があまりにナイーヴで、まったくの時間の無駄であったこと、その誤りと無力さを痛感したのである。

3. コミュニティ活動家への道

(1) より広い世界へ

北アイルランドでの日々に疲れ果てたホールは、1974 年の夏に結婚した妻[8]とともに、アムステルダムに移った。アムステルダムは、ヨーロッパ中のさまざまな国からやってきた若者たちの熱気であふれかえっており、ユース・ホステルからあぶれた者たちは、まるで寄宿舎のように中央公園に寝泊まりしていた。しばらくのあいだ、ホールと妻も、中央公園に寝袋をしいて〈拠点〉とし、やがてホールには缶詰工場で、妻には銀行で職がみつかると、そこから毎日職場に出かけていったと

(8) 妻となった女性はカトリック・コミュニティ出身であり、結婚の際には家族の反対にあったという（2004 年8月24 日のホール氏へのインタビューより）。

いう(もちろんそんな生活はごく短い期間のことで、彼らはすぐに友人のアパートを一時的に借りることになり、その後はハウスボートを手に入れた)。

オランダの友人たちは、そんな彼らの生活を苦労の多いものだと思ったようだが、悪夢のようなベルファストでの生活に比べれば、それはホールと妻にとって何でもないことだった。北アイルランドの状況は日増しに悪くなる一方で、1974 年は、IRA に対抗して、ロイヤリストがカトリックを対象とした無差別殺人を毎日のように繰り広げていた時期だった。アムステルダムに来てしばらくしてから、彼らはベルファストでのそれまでの暮らしがどんなに緊張に満ちたものであったかを、ようやく知ったのである。失われた自由を謳歌することで、彼らの緊張は徐々に解きほぐされていった。

アムステルダムに数年滞在したのち、ホールと妻は、もっと多くの場所に出かけてみたいと思うようになった。そこで彼らはいったんベルファストに戻り(その途中、イングランドの乗り換え地点の駅で、二人は「テロ容疑者」として何時間も拘留されたという!)、さまざまなプランを練った。ホールにとって世界を旅することは、紛争が始まるずっと前から夢見ていたことでもあった。彼は、それまでため込んできた相当な量の古本を売り払って資金にし、2年かけて夫婦で多くの場所を訪れた。トルコ、アフガニスタン、カシミール、ネパール、スリランカ、インド、ビルマ、インドネシア、マレーシア、フィジー、ニューカレドニア、オーストラリア、日本、ロシア・・・。さまざまな国で多くの人びとの暖かさと寛容さに出会うなか、ホールは次のように確信する。

> 宗教や文化の〈違い〉が彼らを分けようとするにもかかわらず、ごく普通の人びとが求めているものは世界中同じなのだ。それは、子どもたちにとって、より良い世界を望んでいるということだ。

こうした思いを胸に、ホールは再びベルファストへ戻ることになった。

(2) ソシアル・ワーカーとしての経験

ベルファストに戻ったホールは、クイーンズ大学の修士課程でソシアル・ワークの学位を取得したのち、国立児童虐待防止協会(NSPCC)に勤務することになった。NSPCC はちょうどその頃、創立百周年を目前に控えて、社会福祉との関わりにおいてこれまでの歩みを振り返り、そのあり方を再定義しようとしていた。そうした状況において、ホールは彼の発案による「コミュニティを中心とした社会福祉へのアプローチ(community-oriented approach to social work)」を展開することを許されたのである。

ホールは、ベルファストおよびニュータウナビーにおける数々のコミュニティ・グループと緊密なつながりをつくりあげ、そのうちのいくつかに対して、毎週決まった時間に、非公式の「診療」をおこなった。これらのグループは、そのコミュニティの取り扱う福祉サービスの一部として、現場のソシアル・ワーカーを提供できることのメリットを享受できたし、ホールとそうしたグループとのあいだに築かれた緊密な協働関係は、ソシアル・ワーカーに対して従来持たれてきた反感をいくらか払拭する役割も果たした。それぞれのコミュニティの場所を訪れた際には、時間の許す限りヴォランティアの人びととゆっくり向き合って、どうしたら彼らがみずからの手で、これまで遭遇してきた数々の問題に取り組むことができるかについて、語りあうことも多かった。

そうしたなかでホールは、すぐに長年にわたって確信してきたことについての充分な証拠を見いだした。それは、それぞれのコミュニティにおいて、いまだ利用されていない力や才能が豊富に眠っているということである。時が巡りめぐって、ホールは再び「個人」と出会った。若者から年配者にいたるまで、彼らのコミットメント、エネルギー、理解力、何かを強く主張する能力は、しばしば多くの訓練を積んだ専門家のそれを上回っていた。コミュニティにおけるヴォランティアたちがこれまで得てきたのは、わずかな指導と支援にすぎず、かわりに問題を回避されたり、専門家にお高くとまられたりするのが日常茶飯事だった。ホールは、コミュニティと連携してのさまざまな実践を通して、専門家は、人びとが生まれ持っている能力が開花するのを手助けするにすぎないことを悟るのである。

しかし、こうしたホールの考え方は、他のソシアル・ワーカーたちからの反感を買うことになった。「深刻な問題を素人の手に委ねている」「ソシアル・ワークのスキルは『30分の茶飲み話し』でもって伝授できるという考えは、大学で専門的訓練を受けた経歴をみずから貶めている」「痛烈な社会・経済批判を展開している著名なコミュニティ活動家との交わりは、協会に迷惑をかけることになる」「明らかな政治目標を掲げるコミュニティに関わり合うことで、そのコミュニティに世間の信用性を与えてしまう」「コミュニティ・グループに、自分の仕事量について口出しをさせている」など、多くの批判が相次いだ。ホールは当然ながらこれらの批判ひとつひとつに明確に対抗できたが、こうした専門家たちからの敵対心の根底には、次のようなことがあったのではないかと指摘している。つまり、彼らは、ソシアル・ワークのスキルというのは、それを伝授された者のみが知る魔法ではなく、的確な訓練によって導かれた常識と理性と生まれ持った能力のコンビネーションであると暴露される危険をおそれていたのではないか、ということである。そしてホールは、7年の勤務を経て、彼が築き上げてきた独自のアプローチを中止するよう申し渡された時、仕方なく NSPCC を辞め、失業手当てを受ける身となった。

(3) コミュニティ活動と多くの出会い

ソシアル・ワーカー時代のホールは、コミュニティに根ざした活動(community-based activities)にも数多く関わった。コミュニティ・ドラマの制作や、ヘーゼルウッド校[9]の設立や、ダウン州にあるクロス・コミュニティ施設である「キンダー・コミュニティ・ハウス」のコーディネイターとしての活動などである。そして、 NCTTP を辞めたのちは、多くのコミュニティ活動家たちと親しく交わり、また、共に仕事に携わった[10]。

当初、ホールがコンタクトをとりあっていたのは主にコミュニティ活動家たちであったが、彼は次第に、武装組織ともそのような関わりを持つ必要があるのではないかと思い始めた。ホールはロイヤリスト最大の武装組織であるアルスター防衛協会(UDA)から脅迫を受けていたことがあったし、彼らに対して「頑固者」「殺人者」というイメージしか持っていなかった。しかし、1984 年に UDA の

(9) 教育の現場が宗派別に著しく分断されている北アイルランドにおいて、 1980 年代に登場したどちらの宗派にも偏らない方針を持つ統合学校(integrated school)の一つとして知られている。

(10) これらの傑出したコミュニティ活動家たちのライフ・ヒストリーについては、 Island Pamphlets シリーズの、No.70, 71, 72, 75, 76, 77 で詳細にとりあげられている。

広報担当者であるサミー・ダディがあらわした詩集を手にとる機会があり、北アイルランドにおける「身内殺し」の悲劇や、政治家によってその運命を左右されてきたプロテスタント労働者階級についての描写を目にして、驚き、また大いに励まされたという。こうしてホールは、「すべてのものは変わりうるし、あらゆる組織は良い面と悪い面を備えている」というみずからの信条に従って、UDA のオフィスを訪ねたのである。

北アイルランドの、そして子どもたちの将来を思うホールの信念と率直な話しぶりは、武装組織のリーダーの心をも掴んだようだった。そのようにして彼は、ロイヤリストの指導者であるジョー・イングリッシュ、サミー・ダディ、アンディ・タイリー、ガスティ・スペンス、ビリーハッチンソンや、リパブリカンの指導者であるトミー・ゴーマン、ジム・マッコーリー、マーティン・マクギネス（現在の北アイルランド副首相）、ジョー・オースティンらと親交を深めていった[11]。事実、それらの組織の名の下で多くの人命が奪われてきた一方で、彼らはホールとのやりとりにおいて、結局は北アイルランドという小さな場所で、カトリックもプロテスタントも変わらないのだ、という非常に人間くさい一面を見せることもあったという。ホールにとってそのことは、ある種の希望を抱かせると同時に、やりきれなさを感じさせるものでもあった。

4. コミュニティに根ざすということ

(1) プロテスタント・コミュニティへの思い

ロイヤリストたち、とりわけ UDA の指導者たちと意見を交わす過程で、ホールはプロテスタント労働者階級において、より多くの緊張と矛盾があることを改めて認識することになった。殺人者や偏狭頑迷な者もいれば、新しい社会の実現と、カトリックという隣人との共存を心から願う人格者もいる。極右的な政治思想を持つ者がいる一方で、ベルファストにおける労働運動の長い伝統を受け継いできた者もいる。彼らこそ、困惑し、裏切られ、怒り、憎しみの感情にとらわれた人びとであったと同時に、理想主義者で進歩主義者でもあったのだ、とホールは感じたのだ[12]。

最も逆説的なのは、こうした緊張と矛盾が、公の場ではほとんど覆い隠されてきただけでなく、プロテスタント・コミュニティの内部においても、まったくないかのように振る舞われてきたことである。これは、部分的には多くの普通の人びとの口を閉ざすことになった暴力の遺産であるが、こうした事柄を探求する場も、議論をすすめていく方法もなかったということも大きい。ホールは、UDA のタイリーらと協力して、プロテスタント・コミュニティが抱えるさまざまな問題を盛り込んだ戯曲の制

---

(11) 彼らとの交友に際して、ホールは興味深いエピソードを披露している。ある日、ホールは UDA のマクマイケルに、「（シン・フェイン党の）マクギネスは人間としてどんな奴か？」と聞かれたが、それは、以前マクギネスがホールに「（ UDA の最高指導者である）タイリーは、人としてどんな奴なのか？」と尋ねたのとまったく同様のフレーズであった。

(12) 筆者はこれまで、こうしたプロテスタント／ユニオニスト／ロイヤリストにおける心性を、「包囲の心理(siege mentality)」という概念を通じて論じてきた。詳細は、尹慧瑛『暴力と和解のあいだ－北アイルランド紛争を生きる人びと』法政大学出版局、2007 年の第3章を参照のこと。

作に取りかかった。劇というパフォーマンスを通してならば、人びとに警戒心を抱かせることなく、興味を惹くことができると考えたからである。カトリック・コミュニティの役者たちの助けも借りながら準備がすすめられていったが、諸事情から、この戯曲が人びとの前で上演されることはついぞなかった。しかし、この試みは、コミュニティに根ざした活動の持つ力－それは時に〈境界〉を超えてもう一方のコミュニティとの連携をももたらした－をホールに再認識させるものとなった。

(2) 集大成としての Island Pamphlets シリーズ

コミュニティの現場で、日常的に耳にするさまざまなアイデアや意見の豊かさと出会ったことは、ホールの長年あたためてきた思いを再びよみがえらせた。それは、出来る限り多くの人びとを、問題の探求や議論、対話にむけて促していく手段をつくりあげるということであった。一つの方法は、いわゆる〈分断〉された両方の側の人びとを直接引き合わせるような、小グループでのディスカッションの実施であった。そしてもう一つは、ブックレットやその他の文字資料によって議論を刺激し広げるような「対-情報ネットワーク(counter-information network)」を形成することであった。

こうして 1993 年に、小グループによるディスカッションと、それらの内容にもとづいた、入手しやすい、さまざまな情報の詰まったブックレットという二つの要素が結びついて、Island Pamphlets シリーズが誕生したのである。補助金を提供する主だった機関からことごとく援助を断られたため、最初の5年間はコストを私費にたよらざるをえず、ブックレットの刊行時期もまちまちであった。しかし、1998 年からは、EU 基金の一部である「北アイルランドおよびアイルランド国境地帯における平和と和解のためのヨーロッパ特別支援プログラム(the special EU programme for peace and reconciliation in Northern Ireland and the Border Counties of Ireland)」と、アイルランド国際基金の両方から援助を受け、長年つきあいのあったファーセット・ユース＆コミュニティ・プロジェクトのサポートの下で、活動は軌道に乗っていった。

ホールは、1998 年から 2005 年までの「ファーセット・コミュニティ・シンクタンク・プロジェクト(FCTTP)」としての活動において、若者や年配者、紛争の犠牲者、元服役囚、コミュニティ・ワーカー、ロイヤリスト、リパブリカン、身障者、女性グループ、コミュニティ開発事業者、インターフェイス[13]を拠点とする活動家、南北アイルランド関係推進者など、多様なディスカッション・グループを支援してきた。対象となる地域も、ベルファストのさまざまなコミュニティからはじまり、デリーやストラバン、そして、イスラエル、パレスチナ、モルドバヴァなど他の紛争地域にまで広がっていった。多くの場合、参加者たちは自分たちの暮らす地域に根ざしたシンクタンクを形成したが、次第に宗派を超えた合同シンクタンクを望むようにもなった。そして、この 30 年間にホールが協力関係を築いてきた 100 を超えるコミュニティ・グループに対して、15 万部以上のブックレットが、これまでに

(13) 居住区が、カトリック多住地区と、プロテスタント多住地区とに分かれているなかで、その境界が接し会う場所。紛争当初に住民どうしの衝突を防ぐという目的で建設された「ピース・ライン」と呼ばれる物理壁もその一つである。最も紛争の被害を受けてきた場所であり、他のコミュニティに比べて圧倒的に失業率が高い。

無料配布されてきた[14]。

(3) 人びとの対話の可能性にむけて

FCTTP の活動をすすめるにあたって、ホールは、参加者みずからに語らせ、彼自身の判断は加えないという姿勢に徹してきた。彼は、北アイルランドにおいて対話の持つ可能性を、次のように述べている。

紛争の犠牲者や紛争によって多くを奪われた人びとの声を世の中に届ける手助けをすることは、私にとってごく自然な成り行きであった。けれども 1973 年の時点では、ロイヤリストやリパブリカン、オレンジメン、そしてその他大勢の根本的に同意できない人びとと同席し、彼らの考えをより広いコミュニティの利益にむけて説明し、明らかにしていく手助けをしていくことになろうとは、想像すらできなかっただろう。しかし私は、この社会が本当の意味で前進できるようになる前に、私たちすべてが互いの声に、そしてみずからの声にもーたとえそれによって不快になったり傷ついたりしてもーきちんと耳を傾けなければならないことを実感した。この社会のすべてのセクションが対等に扱われていると感じることができて初めて、私たちすべてをより安定した未来へと向かわせる、永続的な場に到達する道を探せるのではないかと思う。

おわりに

2004 年のある夏の日、私はマイケル・ホールその人とついにベルファストで対面した。穏やかな、しかし確固たる信念を内に秘めたその佇まいは、今思い起こせば、地道で途方もない労苦を要する作業を長年にわたって続けてきた人にふさわしいものだった。ホール氏は私を自宅に招き入れ、彼の仕事を手伝っているというお嬢さんが、暖かく出迎えてくれた。

遠く日本からやってきて話を聞きたいと言った私に、おそらくホール氏は単純な好奇心を覚えたのだと思う。しかし、たくさんの海外からの「ジャーナリスト」や「学者」たちの北アイルランドへの好奇の目とステレオタイプにもとづいた描写に、さんざんうんざりさせられてきたであろう彼にとって、私もまた、そのような懐疑の対象であったかもしれない。しかし、話をするうち、私たちは次第にうち解けていった。ホール氏の書斎は、本が好きで、文章を書くことが好きな、彼の世界そのものだった。また、旅行好きな彼は、若い頃に訪れた日本について懐かしそうに語ってくれた。スキャナーでとりこんで電子化された古い写真たちは、もう今ではどこにも残っていないかのような美しい日本の情景を映し出していた。

Island Pamphlets についてのエピソードをいろいろと聞くうち、残念な話を耳にした。私や、同じ

(14) Island Pamphlets シリーズのブックレットは、2007 年7月までに 84 冊が発行されている。各タイトルと内容の概略については、 http://cain.ulst.ac.uk/islandpublications/hall07-contents_1-84.pdf でみることができる。また、FCTTP の活動の持つ意義については、尹慧瑛『暴力と和解のあいだ－北アイルランド紛争を生きる人びと』法政大学出版局、2007 年、pp.209-216 を参照のこと。

く北アイルランドに関心を持つ人間にとっては、いわば宝物とも言えるような貴重なブックレットであるが、不思議と普通の書店には置いてなく、コミュニティ関係協議会(CRC)が経営する書店や、クイーンズ大学書店、リネン・ホール・ライブラリーなどで見かけるたびに買い揃えてきた。単なる専門書店との違いや、在庫不足かと思っていたが、ホール氏によれば、ブックレットを置いてもらえるように何度か頼んできたものの、すべて断られてきたのだという。イギリスの都市であればどこにでも見かける大型チェーン店の看板を掲げたある書店では、ロンドンのマネージャーが興味を示したのにもかかわらず、地元の判断で却下されたらしい[15]。少なくともシティセンターにおいては、誰もが〈分断〉を表だって持ち出さないなかで、Island Pamphets が訴えかけるさまざまなメッセージは、あまりにも生々しすぎるのかもしれない。けれども、ブックレットが無料で配布されている各コミュニティ・センターでは、嬉しい反応があるという。例えば、リパブリカンの地区で有名なフォールス・ロードと、ロイヤリストの地区で有名なシャンキル・ロードでは、互いのコミュニティについてのブックレットがそれぞれすぐに無くなったそうである。

暴力の連鎖のなかで出口が見えないかのようだった北アイルランド紛争は、 1990 年代に入って新しい局面を迎えた。1994 年の両派の武装組織による停戦宣言と、それに続く 1998 年のイギリス・アイルランド両政府による和平合意は、北アイルランド社会に大きな期待をもたらし、暴力の克服と〈社会の共有〉への道を切り開いた。その後、数度にわたる自治停止など政治的停滞が続いていたものの、 2007 年3月の北アイルランド議会選挙の結果を受け、同年5月、4年7ヶ月ぶりに自治政府が復活したことで、今後の進展が注目されている。

こうした世界中に配信される政治レベルでのピース・プロセスと比較すれば、ホール氏がおこなってきた活動は、はるかに光のあたらないものかもしれない。けれども、メディアやアカデミックな場における言説がしばしばそうであるように、「可能性」や「展望」に言及するだけではすまされない、多くの絶望と困難とともにそれでも前に進むこと、それが「紛争を生きる」ということなのではないかと、彼はその半生を通じてわれわれに訴えかけている。

(15) 2004 年8月 24 日のホール氏へのインタビューより。